

ペルシャ語の助動詞使役構文における kardan ‘to make’ 及び 軽動詞としての kardan ‘to do’ の相違点

Leyla GHIAEE

要旨

In previous works, the causative verb kardan ‘to make’ is considered as light verbs (LVs) and a distinction is not made between LVs and the causative kardan ‘to make’. In this paper, we will try to differentiate LVs from causatives in Persian. To do so, we will examine the Persian verb kardan ‘to do, to make’ which is the most productive and the most frequently used verb in this language. This verb seems to form unergative light verb constructions (LVCs) and causative predicates. We show that the LV kardan ‘to do’ and causative kardan ‘to make’ are different with respect to argument structure. This paper shows that the causative kardan ‘to make’, bearing an external argument, is different from the LV kardan ‘to do’ and other Persian LVs which do not bear any full syntactic argument on their own. Besides, we show that the combination of every adjective with kardan ‘to make’ produces an auxiliary causal verb and the complex predicate is telic (bounded). But in the case of the LV kardan ‘to do’, the combination of every noun (if the noun is not borrowed from Arabic)¹⁾ produces a light verb construction and the complex predicate is atelic (unbounded).

キーワード：助動詞使役構文，項構造，軽動詞，起動相，受動態

1. はじめに

本稿の目的は、現代ペルシャ語 (Farsi)²⁾ の kardan の様々な構文を分析することである。筆者の調べた限り、これまでのペルシャ語の研究では、助動詞使役構文で使用される kardan ‘to make’ と軽動詞の kardan ‘to do’ がどのように関連しているかということについては詳しい考察がなされておらず、研究の余地が多く残されている。本稿では最初にペルシャ語の助動詞使役の定義、その統語的・意味的特徴を述べた後、軽動詞、項構造の基本的な定義及びペルシャ語の軽動詞について述べる。その後、助動詞使役構文で使用される kardan ‘to make’ と軽動詞の kardan ‘to do’ の相違点について、この二つの動詞の項構造に注目して説明する。更に、助動詞使役の動詞は限界的構文 (telic construction) をなす一方、ペルシャ語の本来の名詞に付加される軽動詞 kardan ‘to do’ は非限界的構文

(atelic construction) をなすことについても述べる。

2. 使役構文の定義

本論では、中右・西村(1998:120,121)に従って、使役動詞を述語動詞とする構文を使役構文と呼ぶことにする。つまりある事態(X)ともう一つの事態(Y)との間に、(X)が原因となって(Y)が生じるという因果関係が成立し、その関係が動詞によって表される構文を「使役構文」と呼ぶことにする。更に、ペルシャ語の使役構文を単文的使役構文と複文的使役構文に分類し、本論で紹介するのは、単文的使役構文のみである。単文的使役構文の被使役者は、対格の後置詞である rā を持ち、直接目的語の位置に現れるか、与格の前置詞である be を持ち、間接目的語の位置に現れるかのどちらか一つの位置に現れる。形態的な違いのみに基づくと、ペルシャ語の単文的使役は以下の3つのタイプに分けられる。

- (1) a. 根源的使役動詞 (root causative verbs)
- b. 形態的使役動詞 (morphological causative verbs)
- c. 助動詞使役動詞 (auxiliary causative verbs)

根源的使役動詞は意味的に使役性が含まれているが、使役に相当する分離可能な形態素がその中に含まれていない動詞のグループを指す。形態的使役動詞の場合は、接尾辞 -ān が非使役形の現在の語幹に付け加えることによって使役形が形成される。最後に、助動詞使役の動詞は、ペルシャ語の複合他動詞の一種であり、以下では、その統語的特徴及び意味的特徴について述べる。

3. ペルシャ語の助動詞使役構文の統語的・意味的特徴

3. 1 統語的特徴

ペルシャ語の単文的使役動詞の中で一番生産的であるクラスは、助動詞使役のクラスである。ペルシャ語の全ての形容詞は助動詞 kardan ‘to make’ と結合することによって、助動詞使役の動詞を生み出す。使役助動詞の kardan ‘to make’ と対立する助動詞は、非使役起動相助動詞 (non-causative inchoative auxiliary verbs) の šodan ‘become’ 及び状態相助動詞 (stative auxiliary verbs) の budan ‘be’ である。(2) は非使役形・助動詞使役形の対立を示すオープンリストの一部である。

(2) 助動詞使役と対応する非使役動詞

非使役動詞	意味	使役動詞	意味
bāz budan / bāz šodan	‘open be/become=be open/open’	bāz kardan	‘open’ (vt)
xāli budan/ xāli šodan	‘empty be/become = be/become empty’	xāli kardan	‘empty’ (vt)
nārāhat budan/šodan	‘angry be/become =be/become angry’	nārāhat kardan	‘make angry’
bozorg budan / bozorg šodan	‘large be./become=be a grown up/grow up’	bozorg kardan	‘raise’
...

(3) 及び (4) はペルシャ語の助動詞使役構文の例である³⁾。

- (3) a. ali nārāhat bud- Ø / šod- Ø
Ali angry was-SU /became-SU
‘Ali was/became angry.’
- b. nasrin ali- rā nārāhat kard- Ø
Nasrin Ali-DO angry made-SU
‘Nasrin made Ali angry.’
- (4) a. pañjere bāz bud- Ø / šod- Ø
window open was-SU /became-SU
‘The window was open/opened.’
- b. nasrin pañjere- rā bāz kard- Ø
Nasrin window-DO open made-SU
‘Nasrin opened the window’

最初に助動詞使役の統語的特徴として取り上げられるのは、このクラスの動詞の語順及び格標識についてである。ペルシャ語の助動詞使役の語順あるいは格標識のパターンは、(5) で示す単文の語順及び格標識のパターンと一致する。

- (5) NP- Ø NP-rā (be/barāy-E- NP) V
NOM ACC DAT

第 2 番目の統語的特徴として取り上げられるのは、このタイプの使役は受動態化あるいは再帰代名詞化という節拘束規則を適用することが出来ることである。(4b) に受動態化規則を使用すると、(6) が発生する。

- (6) panjere (tavassot-E nasrin) bāz kard-e šod- Ø
 Window by Nasrin open made-PART became-SU
 ‘The window was opened by Nasrin.’

(7a) に再帰代名詞化規則を使用すれば、(7b) が出来上がる。

- (7) a. *ānhā_i ānhā_i-rā nārāhat kard-and
 they they-DO angry made-SU
 b. ānhā_i xod-ešān_i- rā nārāhat kard-and
 they self-them-DO angry made-SU
 ‘They made themselves angry.’

第 3 番目の統語的特徴として取り上げられるのは、このタイプの使役とペルシャ語の文の代名詞化 (sentence pronominalization) との相互関係についてである。(8b) 及び (9b) の代名詞である in ‘it; this’ はそれぞれ (8a) 及び (9a) の S₁ に言及する。(8a) 及び (9a) の埋め込み文は、それぞれ (3b) 及び (4b) と一致する。

- (8) a. nasrin_i goft- Ø s₁ [ke u_i ali- rā nārāhat kard- Ø] s₁
 Nasrin said-SU that she Ali-DO angry made-SU
 ‘Nasrin said that she made Ali angry.’
 b. ... ammā in qeyr-e momken ast- Ø
 but this not-Ez possible is-SU
 ‘...but this (= S₁) is impossible.’
- (9) a. nasrin_i goft- Ø s₁ [ke u_i panjere- rā bāz kard- Ø] s₁
 Nasrin said-SU that she window-DO open made-SU
 ‘Nasrin said that she opened the window.’
 b. ... ammā in qeyr-e momken ast- Ø
 but this not-Ez possible is-SU
 ‘...but this (= S₁) is impossible.’

ペルシャ語の助動詞使役の統語的特徴は (10) のようになる。

- (10) a. 助動詞使役構文は非使役単文の語順のパターン及び格標識のパターンと一致する。
- b. 助動詞使役構文は受動態化及び再帰代名詞化という二つの節拘束変形規則が適用できる。
- c. 助動詞使役構文は文代名詞である‘in’の先行詞に成り得る。

以上から、ペルシャ語の助動詞使役は単文的構造を持つと考えられる。

3. 2 意味的特徴

3. 2. 1 使役者によって決まる意味的特徴

有生物の使役者を持つ全ての助動詞使役は意図的な使役を示す。その一方で、無生物の使役者を持つ全ての助動詞使役は偶然的な使役を示す。つまり、助動詞使役の動詞自体が、意図的な使役か偶然的な使役かを決定するわけではない。使役者の「有生性」が、使役構文の意図性か偶然性かを決定する。

- (11) nasrin panjere- rā bāz kard- Ø
Nasrin window-DO open made-SU

‘Nasrin opened the window.’

- a. ... in amal-e nasrin amdi bud- Ø
this action-Ez Nasrin deliberate was-SU

文字通りの意味：‘...This action of Nasrin was deliberate.’

- b. ?...in amal-e nasrin amdi na- bud- Ø
this action-Ez Nasrin deliberate not-was-SU

?‘... This action of Nasrin was not deliberate.’

- (12) bād panjere- rā bāz kard- Ø
wind window-DO open made-SU

‘The wind opened the window.’

- a. ?... in amal-e bād amdi bud- Ø
this action-Ez wind deliberate was-SU

文字通りの意味：?‘...This action of wind was deliberate.’

- b. ...in amal-e bād amdi na- bud- Ø
this action-Ez wind deliberate not-was-SU

‘... This action of wind was not deliberate.’

3. 2. 2 被使役者によって決まる意味的特徴

助動詞使役構文で使用される被使役者の最初の意味的特徴は、有生性に関係するものである。この点については、一貫性の欠如が見られる。(3b)では有生物の被使役者が現れるに対して、(4b)では無生物の被使役者が現れる。しかしながら、(2)で取り上げたサンプルの動詞について考えれば、助動詞使役は主に有生物の被使役者を選択することが分かる。

第2番目の意味特徴は、「強制的・非強制的」というパラメーターに対するの振る舞いについてである。人間である使役者と人間である被使役者との間の相互作用がある全ての助動詞使役は、使役動作が非強制的に行われる。なぜなら、このタイプの使役構文では、使役者が被使役者の心理的な状態に影響を及ぼすからである。つまり、強制的に被使役者の心理的な状態に影響を及ぼすことは不可能であると言える。(13)が不適切であるのは、この主張を支持する。

- (13) ?nasrin bā tavassol be zur ali-rā nārāhat kard-Ø
Nasrin by resorting to force Ali-DO angry made-SU
文字通りの意味：?‘Nasrin by resorting to force made Ali angry.’

第3番目の意味特徴は、「直接的・間接的」というパラメーターに対するの振る舞いに関する。このパラメーターに対するの振る舞いは、被使役者の有生性に関係がある。換言すれば、有生物の被使役者を選択する全ての助動詞使役は、間接的使役を伝える一方で、無生物の被使役者を選択する全ての助動詞使役は、直接的使役を伝える。なぜなら、ある人間が他の人間の心理的な状態に影響を及ぼすのは、間接的使役しか考えられないからである。一方で、直接的な操作によってある人間が無生物の被使役者に何らかの変化をさせることは、自然な傾向である。

最後に、有生物の被使役者を選択する助動詞使役及び無生物の被使役者を選択する助動詞使役と「初動的・制御的」(Shibatani (1973c:65))というパラメーターの間に成り立っている相互関係について述べる。有生物の被使役者を選択する助動詞使役は初動的であり、無生物の被使役者を選択する助動詞使役は制御的である。従って、(3b)において、使役者は結果の出来事のきっかけとなつたに過ぎない。つまり、使役動作が行われるために使役者が単に道を開き、その結果、原因の事象は自動的に発生する。しかしながら、(4b)の場合は、使役者は使役状態の初めから終わりまで影響を及ぼし続ける。

ペルシャ語の助動詞使役の意味特徴は(14)のように纏められる。

- (14) a. 被使役者の有生性から考える際、ペルシャ語の助動詞使役は様々なタイプに分けられる。それにもかかわらず、助動詞使役動詞は主に有生物の被使役者

を選択することが言える。

- b. 「強制的・非強制的」というパラメーターに対してペルシャ語の助動詞使役は非強制的使役を示す。
- c. 「意図的・偶然的」というパラメーターに対して、有生物の使役者を持つ全ての助動詞使役は意図的使役を示す。
- d. 「直接的・間接的」というパラメーターについて述べれば次のようになる。
有生物の被使役者を選択する全ての助動詞使役は間接的使役を示す。一方で、無生物の被使役者を選択する全ての助動詞使役は直接的使役を示す。
- e. 「初動的・制御的」というパラメーターについて述べれば、次のようになる。
有生物の被使役者を選択する全ての助動詞使役は初動的な使役を示す。一方で、無生物の被使役者を選択する全ての助動詞使役は制御的使役を示す。

4. 日本語の軽動詞

Martin (1975) は日本語に数多くの動詞の名詞 (verbal nouns) が存在し、それらが dummy の「する」と結合することによって、複合動詞が生成すると述べている。その場合、複合動詞の項の数を決めるのは、軽動詞ではなく、名詞である。更に、Grimshaw & Mester (1988) は日本語の dummy の動詞「する」を英語の‘make an offer’の中にある‘make’と同様に軽動詞と呼んでいる。日本語の軽動詞構文の例は以下の通りである。

- (15) a. John-ga Mary-ni iku-na-to keikoku-o sita.
 John-NOM Mary-DAT go-not-COMP warning-ACC did
 ‘John warned Mary not to go.’
- b. John-ga Mary-o hihan sita.
 John-NOM Mary-ACC criticism did
 ‘John criticized Mary.’

Sato (1998: 103[1], [2])

多くの場合は、動詞的名詞と「する」の間に格助詞が現れるが、(15b) で示したように、現れない場合もある。「する」は日本語の他の動詞と同様に、テンス要素を持つ。更に、動詞的名詞と「する」からなる複合動詞は、項の数を決めるという点においては、単一動詞と同じ振る舞いを示す。Grimshaw & Mester (1988) は「する」が意味役割上不完全であり、他の要素には θ 役を付与できないと述べている。その一方、Terada (1990) や Isoda (1991) は「軽動詞構文の格助詞を持つ名詞を伴う「する」は動作主の項を要求する」と述べている。更に、Isoda (1991) は「「する」構文に使用される動詞的名詞が、かき混ぜ、受動態化、関係詞節形成変形、話題化変形といった言語的操作に使用される

ことが出来ないことは、「する」が軽動詞ではなく、重動詞であることを意味する。なぜなら、重動詞の「する」も上述した操作で使用されることが出来ないからである」と指摘している。

5. ペルシャ語の軽動詞

Jespersen (1965) や Cattell (1984) に従えば、軽動詞は、それ自体がほとんど意味内容及び述語として機能できる十分な thematic force を持たない動詞のカテゴリーを指す。ペルシャ語の軽動詞は意味的に空であると考えられている (Mohammad and Karimi (1992))。従って、複合動詞に項を与えるのは、軽動詞ではなく、軽動詞の前に出現する名詞である。更に、軽動詞の中に相的情報 (aspectual information) が含まれている。Vahedi-Langrudi (1996)、Karimi-Doostan (1997, 2001a, 2001b)、Karimi (1997)、Megerdooomian (2000, 2001) はペルシャ語の軽動詞について述べている。Karimi-Doostan (1997) によると、(16) に示すようにペルシャ語には 14 個の軽動詞が存在し、使用される頻度順に、以下のようなリストを示している。

(16) a. kardan	'to do'	h. kešidan	'to pull, to tolerate'
b. zadan	'to beat, to hit'	i. yāftan	'to find, to obtain'
c. dādan	'to give'	j. šodan	'to become'
d. dāštan	'to have'	k. raftan	'to go'
e. āmadan	'to come'	l. gozāštan	'to put'
f. āvardan	'to bring'	m. didan	'to tolerate, to experience'
g. xordan	'to collide'	n. baxšidan	'to forgive'

Karimi-Doostan (1997:92[47])

Karimi-Doostan (1997) は軽動詞 kardan 'to do' プラス名詞から成り立つ軽動詞構文の例を以下のように示している。

(17) a. guš kardan	b. hamle kardan
ear to do	attack to do
'to listen'	'to attack'

Karimi-Doostan (1997:92 [49])

Karimi-Doostan (1997) は kardan 'to do' 及び kardan 'to make' の両方をペルシャ語の軽動詞として取り扱っている。以下では kardan 'to do' 及び kardan 'to make' の相違点を示す。

6. kardan ‘to do’ 及び kardan ‘to make’ の相違点

6. 1 項構造

kardan ‘to do’ 及び kardan ‘to make’ の相違点を説明するために、それぞれが使用されている例文を示す。

- (18) a. parvaz kardan b. zendegi kardan
flight to do life to do
‘to fly’ ‘to live’
- c. gerye kardan d. qamgin kardan
cry to do sad to make
‘to cry’ ‘make sad’

(18a～c) の kardan ‘to do’ は軽動詞であるが、(18d) の kardan ‘to make’ は使役動詞である。Park (1992) や Di Sciullo and Rosen (1990) によると、すべての軽動詞に対応する重動詞 (heavy verb) が存在する。また、Butt (1995:144) によるとすべての軽動詞は「その対応する実動詞 (full verb) の bleached version」である。ペルシャ語の古い文学作品を観察してみると、重動詞 kardan は二通りの意味を持っていることが分かる。それは、‘to do’ の意味と ‘to make’ の意味である。

- (19) a. ki čonin karde ast
who so done is
‘Who has done so?’
- b. az daryā sahrā va az ... karde ast
from sea desert and from made is
‘(He) has made desert from sea and from’

(Dehkhoda’s Dictionary: 437)

(19) で示されているように、kardan という実動詞には ‘to do’ の意味 (19a) も存在し、‘to make’ の意味 (19b) も存在する。従って、(18a～c) の kardan の意味が (19a) の意味に由来し、(18d) の意味は (19b) の意味に由来すると言える。更に、軽動詞の kardan ‘to do’ 及び使役動詞の kardan ‘to make’ の項構造も異なると言える。kardan ‘to do’ はペルシャ語の他の軽動詞と同様に、結合される PVS (preverbs) の種類によって、異なる項構造を持つ軽動詞構文を形成する。その一方で、kardan ‘to make’ は形容詞だけと結合し、助動詞使役動詞を形成する。kardan ‘to make’ の構文に必ず動作主の項が存在するということは、この使役動詞がペルシャ語の他の使役動詞と同様に、(20a) で示す不完全な項構造を持つということである。この不完全な項構造の中に完全な使役外項 (full external

causative argument) が存在する。しかしながら、(20b) で示すように、この項構造は kardan ‘to do’には欠けている。つまり、項が特定されていない骨格だけの項構造を持つ。

- (20) a. kardan ‘to make’ [AS < X_{Agent}, >]
 b. kardan ‘to do’ [AS < >]

kardan ‘to make’ の項構造の中に使役外項が存在し、形容詞と結合することによって、(21) のような項構造を形成するが、kardan ‘to do’は結合される PVS の種類によって、異なる項構造を持つ軽動詞構文を形成する (22a,b, c)。

- (21) kardan ‘to make’ [AS < X_{Agent}, >]
ārām ‘silent’ [AS < Y_{Patient}>]
 ↓
ārām kardan ‘pacify’ [AS < X,Y >]

- (22) kardan ‘to do’ [AS < >]
rāhnamāyi ‘advice’ [AS < X,Y >] / raqs ‘dance’ [AS < X >] / soqut [AS < Y >]
 ↓
 a. rāhnamāyi kardan [AS < X, Y >] / b. raqs kardan [AS < X >] / c. soqut kardan [AS < Y >]

kardan ‘to make’及び Kardan ‘to do’が使用される例文はそれぞれ (23a) 及び (23b) である。更に、kardan ‘to make’及び kardan ‘to do’のそれぞれの意味の構造表示 (structural representation of meaning) は (24) 及び (25) のようになる。

- (23) a. mādar bačče-rā ārām kard-Ø
 mother baby-DO silent made-SU
 ‘The mother pacified the baby.’
 b. doxtar-ak dar guše-i gerye mi-kard-Ø
 girl-little in corner-INDEF cry IMPF-did-SU
 ‘The little girl was crying in a corner’

- (24) kardan ‘to make’の意味の構造表示
 a. [VP X_{Agent} CAUSE [VP Y BECOME STATE]]
 b. [VP X_{Agent} CAUSE-BECOME [VP Y STATE]]

(25) kardan ‘to do’の意味の構造表示

- a. [VP DO [NP N_{NOM} [VP Y √root]]]⁴
b. [VP Y DO [NP N_{NOM} [VP √root]]]

(23a) の文には、二つの項が存在する。それは、使役者と被使役者である。この文において、動作主の項は使役動詞 kardan の項であり、被動作主の項は形容詞の項であると考えられる。なぜなら、kardan を状態動詞 (stative verb) あるいは起動動詞 (inchoative verb) と置き換えることによって、使役者が文に現れなくなり、複合構造が一項述語になるからである (26,27)。従って、(23a) において被使役者は形容詞の項であるが、使役者は kardan の項である。

(26) bačče ārām ast
baby silent is (状態相)
‘The baby is silent.’

(27) bačče ārām šod- Ø
baby silent became-SU (動作主なしの起動相)
‘The baby became silent.’

(26) 及び (27) から分かるように、使役動詞 kardan を状態動詞あるいは起動動詞に変えることによって、動作主の項が削除される。

しかしながら、ここではまだ解決されていない問題が残っている。それは、(29b) のような受動態化された軽動詞構文と (28b) のような助動詞使役の代わりに付加詞 (‘by’で現される節のこと) を持つ起動相が使用される文との相違点である。Moyné (1970,1974) は、起動相と受動態の違いについて述べ、ペルシャ語には真の受動態が存在しないと述べている。更に、ペルシャ語では起動相が受動態の代わりに使用されると述べている。この問題は、ペルシャ語母語話者が受動文において動作主を表現したくないという傾向と、軽動詞構文の中には受動態化される場合、軽動詞が削除され、その代わりに受動の補助動詞 šodan ‘to become’が使用されるものがあることに由来する。

起動文には xod be xod ‘on its own’を追加することができるが、受動文には追加することができない。なぜなら、受動構文は動作主の存在を含意する (前提にする) ので、動作主が存在しない文はそれと矛盾するからである。しかしながら、起動文の場合は、動作主の項が含意されていない (前提とされていない) ので、xod be xod ‘on its own’を追加することによって、矛盾が生じない。それゆえに、本論では、起動相と受動相を区別するために、xod be xod ‘on its own’を使用する (30,31)。

(28) a. mādar bačče-rā ārām kard-Ø 助動詞使役

Mother baby-DO silent made-SU

‘The mother silenced the baby.’

b. bačče (tavassote mādar – aš) ārām šod-Ø 起動相

baby by mother-his/her silent became-SU

‘The baby became silent.’

(29) a. mādar bāyad bačče- aš- rā rāhnamāyi bo-kon-ad

mother must child-her-DO advice SUB-do-SU

‘The mother must advise her child.’

能動態の輕動詞構文

b. bačče bāyad (tavassote mādar – aš) rāhnamāyi be-šavad-Ø

child must by mother-his/her advice SUB-become-SU

‘The child must be advised (by his/her mother.)’

受動態

(28b) において‘by’で表されている句は真の動作主の項ではなく、起動相に付加された付加詞である。その一方で、(29b) において‘by’で表される節は受動態化の結果、項でなくなった動作主の項である。これは、(28b、29b) から‘by’の句を削除し、xod be xod ‘on its/her/his own’を付け加えると、明白になる (30,31)。

(30) bačče xod be xod ārām šod-Ø 起動相

child on his own silent became-SU

‘The child became silent on his/her own.’

(31) * bačče bāyad xod be xod rāhnamāyi be-šavad-Ø

child must on his own advice SUB-become-SU

‘The child must be advised on his/her own.’

受動態

(31) は非文法的であるのは、(29b) の動作主の存在が文の意味の中に残されているからである。更に、(28a) から使役動詞 kardan を削除することによって、外項 (使役者=お母さん) も削除される。しかしながら、(29a) の kardan は輕動詞なので、kardan が削除されても、使役者が削除されることは許されない。

要するに、ペルシャ語の助動詞使役構文で使用される使役動詞 kardan ‘to make’は、(20a) で示したように外項を持ち、項が特定されていない骨格だけの項構造を持つ輕動詞 kardan ‘to do’またはペルシャ語の他の輕動詞とは違う。従って、kardan ‘to make’をペルシャ語の輕動詞の一つと見なしてはならないと言える。

6. 2 分析可能性

もう一つの相違点として、軽動詞 kardan ‘to do’が使用される LVC においては、kardan と kardan の前に出現する名詞の間に形容詞が使用できるのに対し、助動詞使役 kardan ‘to make’とその前に出現する形容詞を如何なる方法でも分析できないということが挙げられる。(28) 及び (29) で使用された動詞、つまり ārām kardan ‘pacify’及び rāhnamāyi kardan ‘to guide’の間に形容詞を挿入し、ārām ‘quiet’及び rāhnamāyi ‘guidance’を修飾すると、軽動詞 kardan を持つ文は文法的になるが、助動詞使役 kardan を持つ文は非文法的になる。

(34) 及び (35) も同様である。davat kardan ‘invite’の kardan は軽動詞であるので、davat ‘invitation’及び kardan の間に rasmi ‘formal’は挿入可能であるが、xošhāl kardan の kardan は助動詞使役であるので、xošhāl 及び kardan の間に形容詞は挿入不可能である。

(32) mādar farzand-aš-rā rāhnamayi-ye kub-i kard-Ø
 mother child-her-DO advice-Ez good- INDEF did-SU
 ‘The mother did a great advice to her child.’

(33) *mādar farzand-aš-rā ārām-e kub-i kard-Ø
 mother child-her-DO silent-Ez good- INDEF made-SU
 ‘The mother pacified her child greatly.’

(34) ali az rais-e edare davat-e rasmi kard-Ø
 Ali from boss-Ez office invitation-Ez formal did-SU
 ‘Ali extended a formal invitation to the boss of the office.’

(35) *ali maryam-rā xošhāl-e šadid-i kard-Ø
 Ali Maryam-DO happy-Ez hard- INDEF made-SU
 文字通りの意味：？‘Ali made Maryam happy hard.’

6. 3 重動詞

軽動詞 kardan ‘to do’から成る複合述語 (complex predicates) に対応する単一動詞がペルシャ語には存在するが、助動詞使役 kardan ‘to make’から成る複合述語に対応する単一動詞は存在しない。

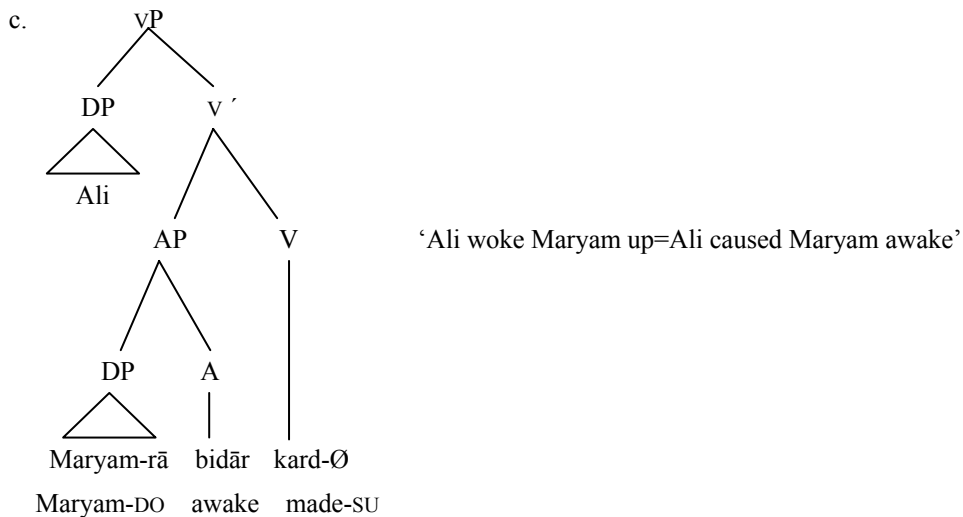
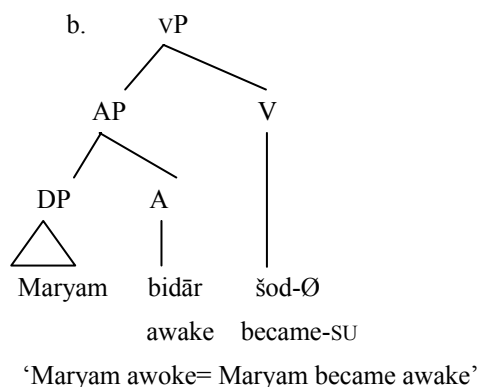
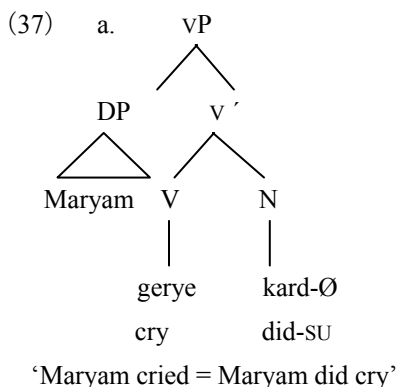
(36)	単一動詞	複合動詞
	rahnemudan ‘to guide’	rāhnamāyi kardan ‘to guide’
	paridan ‘to fly’	parvāz kardan ‘to fly’

zistan 'to live'
geristan 'to cry'

zendeği kardan 'to live'
gerye kardan 'to cry'

6. 4 相的情報（「限界的相」対「非限界的相」）

Hale & Keyser (1993) たちの語彙構造へのアプローチにおいては、VP の下に含まれている埋め込みの構造の種類と whole predicate の相 (Aktionsart) の間に相互関係が存在する。以下では、最初にペルシャ語の非能格動詞、起動動詞や使役動詞の木構造を示し、その後それぞれが限界的であるか、非限界的であるかを証明するためのテストを示す。



英語の非能格動詞、起動動詞や使役動詞が限界的であるか、非限界的であるかを証明するためのテストは以下のようなものである。

- (38) a. Mary worked for 3 hours/*in 3 hours
 b. The window closed *for 2 minutes/ in 2 minutes
 c. Mary closed the window *for 2 minutes/ in 2 minutes

(37a) の述語は非能格動詞であり、Vandler の用語を使用すると、活動 (activity) であるが、(37b、c) の述語は起動動詞や使役動詞であり、達成 (Accomplishment) である。

(38) で示したような標準的なテストによって、ある動詞が活動 (非限界的動詞) か達成 (限界的動詞) かが決められる。同様のテストによって、ペルシャ語の助動詞使役動詞と軽動詞の相が明白になる。

- (39) maryam *dar yek sāat / sāat-hā gerye kard- Ø
 Maryam in one hour hour-PL cry did-SU
 ‘Maryam cried *in one hour/for hours.’

- (40) maryam dar yek sāat / *sāat-hā qofl-e dar-rā bāz kard- Ø
 Maryam in half hour/ hour-PL lock-Ez door-DO open made-SU
 ‘Maryam opened the door lock in half an hour/*for hours.’

(39) の複合動詞の中に gerye ‘cry’ という名詞が含まれているので、この複合動詞の kardan は ‘to do’ の意味の軽動詞構文になり、非限界的になる。従って、継続副詞 (sāat-hā ‘for hours’) が使用される場合は、文法的になる。一方で、(40) の複合動詞の中に含まれている kardan は ‘to make’ の意味の使役動詞なので、bāz kardan ‘open’ という複合動詞が限界的になり、継続副詞と共存できない。

上述したものを要約すると、ペルシャ語の助動詞使役構文で使用される kardan は、常に形容詞を伴い、限界的複合動詞を生成するが、名詞と結合される kardan ‘to do’ は、非限界的複合動詞を生成する。従って、この2つの動詞は項構造的にも相的にも異なると言える。

7. 結論と今後の課題

本稿において、ペルシャ語の助動詞使役構文を紹介した上で、その統語的・意味的特徴について述べた。更に、助動詞使役構文で使用される kardan ‘to make’ と、名詞と共に軽動詞構文で出現する kardan ‘to do’ の相違点について述べた。この2つの動詞は、項構造的にも相的にも異なる。つまり、助動詞使役構文で使用される kardan は、外項として動作主を要求するが、軽動詞構文で使用される kardan はそうではない。更に、この2つの動詞のアスペクトも異なる。つまり、助動詞使役構文で使用される kardan は常に形容

詞と結合し、限界的相となるが、軽動詞構文で使用される kardan は常に名詞と結合し、非限界的相となる。

本論では、kardan の文法化については述べていない。従って、助動詞使役構文で使用される kardan と軽動詞構文で使用される kardan は、歴史的にどのように本動詞 kardan から発生したかを明らかにする必要があると思われる。

註

- 1) ペルシャ語には hazf ‘deletion’, xalq ‘creation’, avaz ‘change’, dafz ‘repulsion’ といったアラビア語の外来語が数多く存在する。これらの名詞はペルシャ語本来の名詞と同様に軽動詞 kardan ‘to do’ と結合することによって、軽動詞構文を生み出す。しかしながら、ペルシャ語本来の名詞は kardan ‘to do’ と結合することによって、非限界的複合動詞を生成するが、アラビア語の名詞は限界的複合動詞を生成す。本稿では、そのような名詞が使用される軽動詞構文は取り上げない。

i: man *sāat-ha / dar ye saat tamām-e ettelāāt-e kāmپیوتر-rā hazf kardam
I hour-PL in one hour all-Ez data-Ez computer-DO deletion did-SU
‘I deleted all data of the computer *for hours/ in one hour.’

ii: xodāvand zamin va āsemān-rā dar haft ruz /*ruz-hā xalq kard-Ø
God earth and sky-DO in seven day /*day-PL creation made-SU
‘The God created the sky and the earth in seven days/*days.’

- 2) 現代ペルシャ語とはイランの首都つまりテヘランの学校教育を受けた人の標準的な言語形態である。現代標準ペルシャ語はイランにおける公用語である。
- 3) 本稿ではグロスに次のような記号を使用する。ACC (Accusative) : 対格、COMP (Complementizer) : 補文標識、DAT (Dative) : 与格、Ez (Ezafe) : 属格、DO (Direct Object) : 直接目的語、IMPF (Imperfective) : 未完了時制、INDEF (Indefinite Article) : 不定冠詞、NOM (Nominative) : 主格、PART (Participle) : 分詞、PL (Plural) : 複数、SU (Subject) : 主語、SUB (Subjunctive) : 仮定法。
- 4) 本稿において、動詞の語根 (root of the verb) を Pesetsky (1995) に従って“√”と示している。

参考文献

- Butt, M. 1995. *The Structure of Complex Predicates*. Stanford: Center for the Study of Language and Information.
- Cattel, R. 1984. *Syntax and Semantics 17: Composite Predicates in English*: London: Academic Press.
- Dehkhoda, A. A. 1965. *Loghat nameye dekhoda (Dehkhoda Dictionary)*, Tehran.
- Di Sciullo, A.M. and Rosen, S.T. 1990. Light verb and Semi-Light Verb Constructions in K. Dziwierk, P. Farrel and E.M. Bikandi (eds.), *Grammatical Relations*. Stanford: Center for the Study of Language and Information.
- Grimshaw, J., & Mester, A., 1988. Light Verbs and θ -marking, *Linguistic Inquiry* 19, 205-232.
- Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser. 1993. on Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations. In Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser. (Eds.), *the View from Building 20*, Cambridge, MA: The MIT Press, 53-110.
- Isoda, M. 1991. The Light verb Construction in Japanese. *Chicago Linguistic Society* 27. 261-275. Chicago: University of Chicago.

- Jespersen, O. 1965. *A Modern English Grammar on Historical Principle*. London: George & Unwin.
- Karimi-Doostan, Gh., 1997. Light Verb Construction in Persian. Ph.D. Dissertation, Essex University, England.
- Karimi-Doostan, Gh., 2001a. N+V Complex Predicates in Persian. In: Dehe, Nichole, Wanner, A. (Eds.), *Structural Aspects of Semantics Complex Verbs*. Peter Lang, Frankfurt, 277-292.
- Karimi-Doostan, Gh., 2001b. Ilami Kurdish. Kurdistan University Press, Sanandaj.
- Karimi, S., 1997. Persian Complex Verbs: Idiomatic or Compositional. *Lexicology* 3, 273-318.
- Martin, S. 1975. *Reference Grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
- Megerdoomian, K., 2000a. Beyond words and phrases: a unified theory of predicated composition. Ph.D. Dissertation, University of Southern California.
- Megerdoomian, K., 2001. Event Structure and Complex Predicates (in press), *Canadian Journal of Linguistics* 46, 97-125.
- Mohammad and Karimi, 1992. Light Verbs are taking over: Complex Verbs in Persian. *Proceeding of the Western Conference on Linguistics* 5: 195-212.
- Moyne, J.A. 1970. The Structure of Verbal Constructions in Persian. Unpublished Ph.D. Dissertation. Harvard University.
- Moyne, J.A. 1974. The So called Passive in Persian. *Foundations of language* 12. 249-267
- Park, K., 1992. *Light Verb Constructions in Korean and Japanese*. University of North Carolina at Chapel Hill.
- Pesetsky, D., 1995. *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Sato, Y. 1998. A Zero Light Verb in Early Child Japanese. *Division at Language*. 103-116. International Christian University.
- Shibatani, Masayoshi. 1972. Three Reasons for not Driving 'Kill' from 'Cause to Die' in Japanese. Kimball, J. (Ed.), *Syntax and Semantics*. 1, Academic Press.
- Shibatani, M. 1973a. Semantics of Japanese Causativization. *Foundations of Language* 9: 327-373.
- Shibatani, M. 1973b. Lexical versus periphrastic causative in Korean. *Journal of Linguistics* 9 (2): 281-297.
- Shibatani, M. 1973c. A Linguistic Study of Causative Constructions. Ph.D. Dissertation. University of California at Berkeley. Mimeographed. Bloomington: The Indiana University linguistic Club, 1975.
- Shibatani, M. 1976. The Grammar of Causative Constructions: *A Conspectus*. *Syntax and semantics* 6: 1-40.
- Shibatani, M. (Ed.) 2002. *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation*. John Benjamins Publishing Company.
- Terada, M. 1990. Incorporation and Argument Structure in Japanese. Ph.D. Dissertation. University of Massachusetts.
- Vahedi-Langrudi, M. 1996. The Syntax, Semantics and Argument Structure of Complex Predicates in Modern Farsi. Ph.D. Dissertation. University of Ottawa.
- 中右実・西村義樹. 1998. 『構文と事象構造』. 研究者出版. 119 - 132.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』大修館.